# 雲鈴・暁台・乙二等巻子本一巻

## ――糸魚川市歴史民俗資料館蔵俳諧資料考（4）――

玉城　司

糸魚川市歴史民俗資料館所蔵の相馬御風旧蔵資料に「古志のなごり」（志保里七六～二十）と題する巻子本がある。これには、雲鈴・五竹坊・廬元坊・暁台・以南・士朗・乙二の七人の懐紙や色紙が貼り込まれている。以南は出雲崎の俳人であり、その他は越後（新潟県）行脚を果した、同地ゆかりの俳人たちである。一巻の題名は、地名「越」（「古志」）に因む命名であると推察される。

越後地方は、芭蕉「おくのほそ道」曾遊の地である。同地は、芭蕉没後支考の熱心な俳壇経営が実り美濃派俳諧の一基盤であった。廬元坊・五竹坊は、支考の正統を継ぐ俳人として、越後を旅したのである。

雲鈴・暁台・士朗・乙二は、美濃派俳諧を敷衍する目的で越後行を果したのではない。しかし、雲鈴は最初支考門であり、暁台は美濃派の巴雀・白尼父子に師事して俳諧を始めた尾張俳人。そして士朗は暁台門。美濃派との縁は深い。乙二は九州地方への行脚を目して、その途上越後へ赴いたものらしい。美濃派とは直接関係ないが、支考流の蕉風俳諧が根付いており、多くの俳人が存在していた故に、越後を経由したのであると考えられる。彼らも、美濃派が開拓・啓発した俳諧の基盤に依っていたことは想像に難くない。

年代は、享保二年（一七一七）雲鈴没以後文政六年（一八二三）乙二没までおよそ百年。この間に雲鈴・乙二以外の俳人たちも鬼籍に入っている。没年でならべると、雲鈴・廬元坊・五竹坊・暁台・以南・士朗の順となり、廬元坊と五竹坊が入れ替わっているが、本巻子はほぼ年代順に貼り込まれている。俳諧史上では、芭蕉直門の支考の次の世代（享保期）から化政期に及ぶ。とりわけ、俳諧中興期の五傑のひとり暁台の大色紙が本巻に収録されているのは、注目されよう。

本巻子本がもつ意義は、ひとつに美濃派俳人と越後地方の俳人との風交のありかたを具体的に窺うことができる点にある。また、暁台による芭蕉八十五回忌が、安永六年（一七七七）越後与板で営まれていたという新事実を知ることができる点にもある。

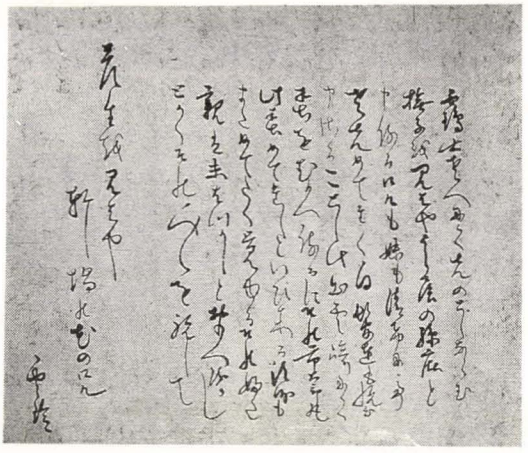
本稿では、この一巻を貼り込まれた順に紹介し、可能な限り執筆年次等について考察を加え、今後の研究資料としたいと思う。しかし、未詳の部分も多いので、ご教示いただければ幸いである。なお、翻刻に際しては、本文には句読点のみ補い、旧漢字は原則として新

漢字に改めた。

雲鈴懐紙

鶴士老人にて先のとしならむ、
撫子を見はやうら屋の孫庇
と申し侍る。兄も妹も清けにて、老先めてたく白髪達も悦ひ申さる。ことし此出雲崎にて、春をむかへ侍るに、その市太郎丸、此春めてたしといひ来る頃、なもまためてたく覚ゆる。そのふた親は末はつかしとおもへ侍るかし。とかくその人〳〵を祝して、
彦生を見はや軒端の花の兄

雲　鈴



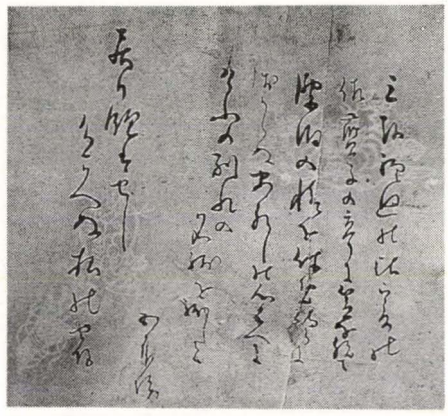
雲鈴は姓氏未詳。摩詰庵・婆旦人・茶九蓮寺・吹簫軒等と号した。享保二年（一七一七）二月二日、出雲崎にて没。もと南部藩の武士であったが致仕して僧となったと言う。初め支考門、許六とも風交を結んだ。元禄十一年（一六九八）支考に従って九州へ赴き、後に佐渡・越後に二十余年在住した。

本懐紙執筆年次は未詳である。またこの句文の冒頭に言う「鶴士老人」についても未詳であるが、正徳五年刊（一七一五）市川筌滉『小太郎』と同年刊雲鈴編『笈の若葉』には、出雲崎の所付で鶴士の発句を所載しているから、少なくともこの頃まで存命していたものと推察される。本句文で雲鈴が「鶴士老人」と呼ぶことや、雲鈴が鶴士に兄事していた様子が窺えるので、雲鈴より年長と見ていい。鶴士の年齢が推定できる資料があれば、雲鈴の享年もある程度まで限定する事ができようが、今それを知らない。

ところで、尚白は出雲崎での雲鈴のくらしぶりを「庵主雲鈴居士とやら乞食とやら申けるとかや、薪に蕨とりそへて笈の一所帯」（『笈の若葉』後序）と伝えている。雲鈴は乞食同様に生き、旅姿そのものが生活のスタイルであったらしい。こうした非定住者としての彼が、鶴士一家の子々孫々の繁栄を寿ぐ姿勢に俳諧師たる一面目が窺えよう。

五竹坊懐紙

三越脚廻の比、爰の佐藍子の亭に笠を脱て、漂泊の情を休め侍るに、浅からぬあるしの心はへに、けふの別れの名残を残して、



五竹坊

居り飽はせし色かへぬ松の宿

五竹坊は、美濃派四世。俗名田中市郎八。薙髪して東伯。別号、五筑坊・帰仙童・琴左等。美濃北方の人。安永九年（一七八〇）七月二十六日没。八十一歳。

五竹坊が廬元坊の意向に沿って、三越路を行脚したのは、延享二年（一七四四）四十六歳の折である。本懐紙の執筆年は、この年と考えられる。

佐藍は糸魚川の俳人。森川昭氏「美濃派俳人の北陸行脚」（『俳文芸』第三十一号）所引の廬元坊筆五竹坊所持「添状」に記載された俗名は、松山清右衛門。佐藍句は、管見では享保十四年（一七二九）刊玉蘭編『五月雨山』以降宝暦三年（一七五三）刊『むめの夜話』まで二十数年美濃派俳書に入集する。

ところで、五竹坊は、森川氏の右の論文によれば、旅を好まなかった様である。実際、彼の旅は、師の廬元坊によって企画された、美濃派の道統を継承するための修行の旅であり、乗り気ではなかった様である。しかし、その旅が本句文で記すような「漂白の情」を抱いての旅であったとすれば、興味深い。旅を俳諧宗匠になるための重要な修行のひとつとした地方系俳人と江戸で充足する都市系俳人とは、俳諧に対する姿勢そのものが相違するからである。

たとえば、江戸俳人秀億は、

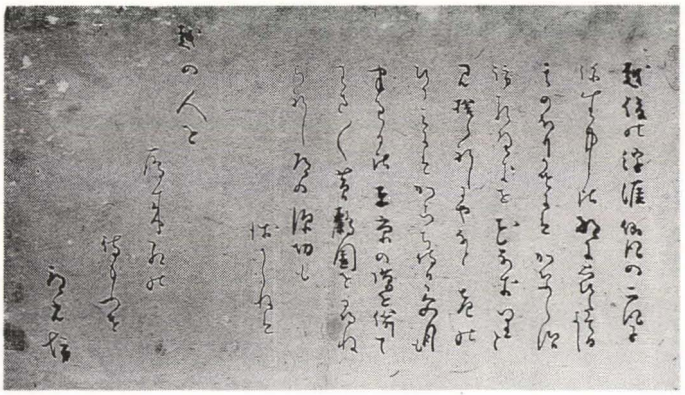
俳諧修行は、江戸にきはまる也。一年三百六十五日、縦横偏(ママ)歴、俳席を家にすとも過まじ。誠や奈良茶三石といひしは此地に有べし。他国他郷の俳師家伝をいひたて、みづからを称するもの、いくらも〳〵見へたるはいぶかし（宝暦十三年『標雑談』）。

と言う。江戸が諸国諸流の集まる俳諧の国であり、俳諧の修行はこの地で足れりとする自負から生れた言葉である。美濃派俳人が地方への旅を通じて勢力を拡張するといった現実的な目的があったとは言え、旅でなければ味わえない人情の機微にふれ、「漂白の情」を否応なくも感じざるを得なかったのに対し、江戸で充足する都市俳人たちが、言葉遊びとしての俳諧に傾いていったのは無理からぬことであったろう。

旅を俳諧の修行のひとつとみた美濃派の行き方は、非日常（漂白の情）と日常（修行）を細い糸で結ぶ術を心得ていたのではあるまいか。「ありのまま」「かざりなし」が中興期俳人たちが標榜する、人情を重視した俳論である。これは、言葉の修行を第一とする都市的な俳諧からは生れまい。旅人の「漂白の情」は、市井の人情にふれて、庶民詩である俳諧に結実していったのであろう。

## 廬元坊色紙

越後の浮涯・仙風の二風子、弥生中比、なに思ひたてるよし、其のほりかけにはかならす訪るへきを、花なき里と見捨てられし



にやなと、老のひかみにはかこち侍るか、文月も半過る比、在京の隙を偸てわさ〳〵黄鸛園を尋ねられし道の深切も浅からねは、越の人を鳫来紅の待もふけ

　　盧元坊（印）（印）

盧元坊は、美濃派三世。俗名仙石与兵衛。本名佐野八三郎。美濃北方の人。別号、里紅・黄鸛園・茶話窟。延享四年（一七四七）五月十日没。六十歳。

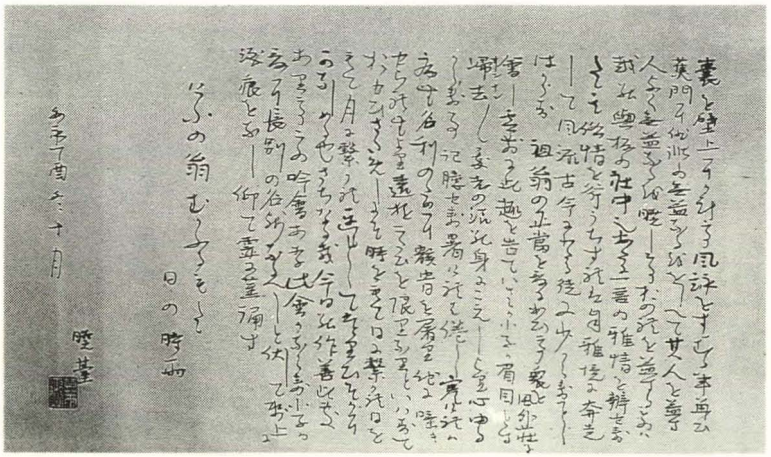
越路行脚は、享保十二年（一七二七）で『桃の首途』はこの記念集。同十五・十六年には山陽から四国・九州に渡り、『藤の首途』を、同十九年には、越前に赴いて『卯花笠』を編んでいるから、精力的に地方行脚を果した支考門の忠実な継承者と言えよう。

浮涯・仙風は、出雲崎の俳人。盧元坊筆五竹坊所持「添状」（森川氏論文所引）によれば、浮涯は俗名鳥井吉次郎、仙風は内藤多兵衛。本句文から、この二人が某年三月上京する途中、美濃の盧元坊を訪ねる約束をしていたが、それを果たさず上京、京都滞在中の七月中旬頃に訪問が実現したのである、と知ることができる。四か月以上に及ぶ京都滞在からみて、ふたりは商人であったように思われる。上京年は未詳だが、盧元坊の「老のひがみ」という言葉から寛保元年（一七四一）以降のことであったろうか。

ところで、盧元坊は二人の訪問に対し「道の深切も浅からねば」と言う。俳諧の道における人間関係のつながりに託す思いの深さを読み取るべきである。人脈を通じての美濃派俳壇経営は戦略であるが、功利的言辞とのみ割り切るべきではないだろう。

暁台大色紙

嚢を壁上にかけて風詠をすゝむる事、再ひ蕉門に俳諧の無益なるををしへて、其人を益す人なく、無益なるを暁して、おのれを益するものは、越の与板の社中也。あたに一言の雅情を弁せず、たゝ其俗情を斧うちすれは、自雅境に奔走して、風流古今にわたる徒、又少からす。ことし



はからす祖翁の正当を爰にあひて、衆を風外荘に会し、霊前に此趣を告て、いさゝか小子か眉目とす。帰去(サンナン)〳〵、我老の浪の身にこえしより、心ゆるからす事、記臆(ママ)せす。暑けれは倦し、寒けれは病む。名利のために骸骨を屠り、他に唾キせられむより、遠遊こたひを限りなりといはすて、おもひさためしにそ、時をもて日に繋かれ、日をもて月に繋かれ、遅々としてひとりひそかにかなしめる也。さちなる哉、今日の作善、此処ありてこの吟会あり。此会かならす小子か爰に長別の名残なるへしと、伏して萬上に涙痕をなし、仰て霊に薫誦す。

けふの翁むかふるもたゝ日の時雨

安永丁酉冬　十月　　暁　台（暮雨巷）

暁台は、享保十七年（一七三二）九月一日生、寛政四年（一七九二）一月二十日没。本名岸田氏、後に加藤氏の養子となる。尾張藩士。宝暦十三年（一七六三）芭蕉七十回忌に『蛙啼集』で橋守園連中を後援し芭蕉復興の第一声を揚げ、天明三年（一七八三）年芭蕉百回忌取越追善俳諧の興行に及ぶなど、芭蕉復興運動に貢献した。

暁台の越後行脚は、矢羽勝幸氏「暁台の越後行　付、翻刻『なづな集』」（『俳文芸』第二十七号）で、明和七年『二編しをり萩』の旅、安永四年六月『佐渡日記』（旦水編）の旅、天明五年冬『なづな集』の旅、寛政三年六月の旅の四回を数えられている。

さて、本句文末尾の年次「安永丁酉冬」は安永六年（一七七七）である。暁台、四十六歳。この年の暁台の動静を伊藤東吉氏『暁台の研究』（藤園堂書店）所載「暁台年譜」によって記す。

○都貢一周忌に当る五月八日、遠く奥州松島風星庵（白居）に在り。追悼の歌仙一巻を興行（蕭条篇）。

○九月、徐英輯、都貢追善集『蕭条篇』刊。暁台立句の歌仙二を収む。

○眠郎編『雪の薄』（冬刊）に発句一入集。

暁台がいつ松島から戻ったか分からないが、本色紙に言う『さちなる哉、今日の作善、此処ありてこの吟会あり」の文言と「けふの翁むかふるもたゝ日の時雨」の発句から、十月十二日に芭蕉忌を越後与板で営んでいたことが確認できる。したがって、安永六年も暁台の越後行に加えられる。この年は、芭蕉八十五回忌に当たる。

ところで、昨年、大内初夫氏監修『時雨会集成』（義仲寺・落柿舎）が出版された。同書は、宝暦十三年（一七六三）以降天保五年（一八三四）までの七十二年間に及び年々刊行された、義仲寺における芭蕉忌の記念集『しぐれ会』の集成であり、中興期以降の俳諧を考える上で大変ありがたい本である。

同書田中道雄氏の解説によれば、明和八年から寛政五年の二十三年間は、芭蕉復興運動期にあたる。義仲寺を本拠としたこの運動は、蝶夢の指導下に行なわれ、「俳壇には、高揚した精神がみなぎり、文学運動らしい情況が現れ」た時期であると言う。暁台が活動した時代は、この時期に重なる。

しかし、同書索引によって暁台の『しぐれ会』入集状況をみると、

寛政二年に「ながらへば一もと草に初時雨」の発句が収録されているにすぎない。他の中興期俳諧の名家の発句収録数は、闌更十二を別にすれば、蕪村零、樗良二、蓼太三、麦水一と少ないので、暁台のみが特別少ないわけではない。各地各俳人各様の方法で、芭蕉復興運動がなされていたことがこの事実からも窺える。それ故逆に、蝶夢が多極化した俳壇を、寛政五年の芭蕉百回忌にむけて統一して行くには、なみなみならぬ努力が必要であったろうと推察される。ともあれ、暁台と義仲寺時雨会の結びつきは、強いものではなかったとみていい。

しかし、暁台が芭蕉追善俳諧に関心を寄せていた事は、芭蕉七十回忌記念集『蛙啼集』に序を記している一例をみても明白である。また、前引した伊藤氏の「暁台年譜」から、明和八年、安永三年、寛政二年の芭蕉忌における連句興行や撰集への出句も確かめることができる。安永六年もこれに加えていいだろうが、暁台は蝶夢のように年々の芭蕉忌を営み、その記念集を出版していない。蝶夢と暁台は別の行き方で、芭蕉復興を図ったのである。

蝶夢句は『しぐれ会』に四十ほど収録されている。これらを見渡してみると、時雨と芭蕉忌を取り合わせて成った句が多いことに改めて驚かされる。因に、安永四年から六年の『しぐれ会』所載の蝶夢発句を引く。

しぐる、や竜が岡には夕もみじ
上る日に跡なく□（消ん）ぬ初しぐれ
しぐる、や隣はむかし無名庵

いずれの句も芭蕉忌と時雨の連想が分かち難く結び付き、時雨のさびしさに感じて、芭蕉追悼の思いを深くするのである。

しかし、暁台の句はそうではない。文化六年刊『暁台句集』（古典俳文学体系13所収）から、前書「義仲寺蕉翁牌前」の発句五句を引いてみよう。

霜にふして思ひ入事地三尺
けふの今いまより後のかれ尾花
霜の庵旅寐まねびに佗申
雲はしぐれ鐘はその世の感に伏
障子まで来る蠅も有翁の日

これらの句には、時雨によって象徴化された芭蕉は詠まれていない。霜は、「芭蕉翁終焉記」所収の乙州発句「日にまして見ます顔也菊の霜」からの連想であろう。かれ尾花は、「芭蕉翁終焉記」を所載する其角『枯尾華』に発するだろうし、蠅は支考『笈日記』十月十二日芭蕉終焉の日の逸話――障子に集まった蠅を鳥もちで「かりあり」いたと言う――をふまえての作である。暁台は先に引用した寛政二年『しぐれ会』収録句を除けば、義仲寺の芭蕉牌前での発句に時雨を詠みこまなかったように思われる。これは、意図的にそうしたのであり、蝶夢らの時雨会と句作上で一線を画すためであった、と考えていいだろう。

また、『暁台句集』には「時雨」句、

鳩の巣のあらはなるよりしぐれそめ
しぐれねばものあらたまる日もあらず

を収録しているが、これも芭蕉忌を連想させるものではなく、意図的にそうした連想を避けての句作であったと思われる。

しかし、本色紙に記された暁台発句、

　けふの翁むかふるもたゝ日の時雨

では、芭蕉と時雨が自然に結びつく。それはひとつに、暁台自身の初冬の旅が、「旅人と我が名呼ばれん初時雨」という芭蕉の旅のイメージと重ね合わされたためだろう。また、越後与板が、大津義仲寺とは遠く隔たった地であり、暁台は蝶夢らを意識せず素直に芭蕉忌に時雨を詠みえたからではあるまいか。蝶夢を中心とする義仲寺時雨会の影響がこうした形であらわれたとみても、まったくの見当違いではないだろう。

なお、『暁台句集』冬の部所載「与板留別」の前書をもつ発句、「此別梅も葉おちて柳ほそし」とこれに続く「越シ人は斯ても経けり冬がまへ」は、安永六年作の可能性があるように思われる。

以南独吟懐紙

寛政壬子十月以南独吟

　歌仙行

から〳〵と岩走る水に落葉哉

　夕山おろし霜帯て明く

五位六位車やとりにおし合ふて

　粢のまゝの腹へらしけり

夜や更ぬ重る雲に月暗く

　尾華の末に狐のかれ声

野宮の秋には似たる物もなし

　拐出せむ盈拝成せ（難読）

起あかる枕に卓子ころけたり

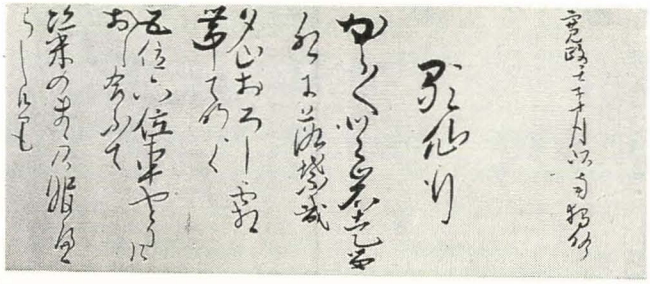
　流にまかす舟のすゝしさ

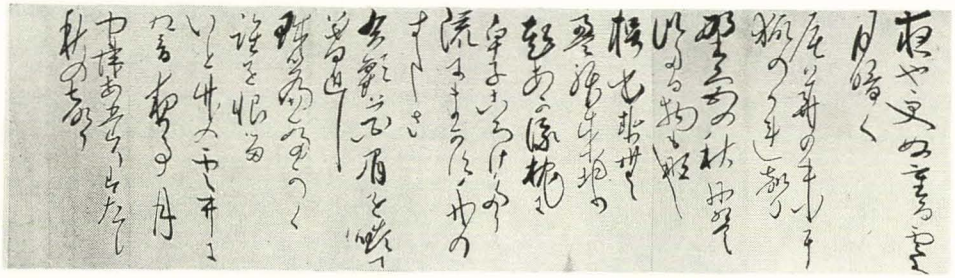
合歓花眉を嚬て暮近し

　珠簾ふかく誰を恨る

いと竹の雲井に響夜事月

　中津あたりはたゝ秋の声





以南は、良寛の父。俗名橘左門泰雄。前号如翠。元文元年（一七三六）生、寛政七年（一七九五）七月二十五日没。六十歳。越後国三島郡与板町新木与五右衛門次男で、出雲崎名主橘屋の養子となる。俳諧は美濃派の北溟門。暁台・月居・士朗らと交誼があった。

佐藤吉太郎『良寛の父橘以南』（第一書房昭和十八年刊、出雲崎史談会　同五十六年復刻）には、以南自筆として、これと同じ字配り・内容の独吟歌仙の写真を掲載する。本懐紙との相違点はひとつに、巻頭の年記にある。本懐紙では明確に「寛政壬子（四年）十月」と判読できるが、佐藤氏は「寛政癸子十月」とされ、氏は「壬」を「癸」（癸丑は同五年）と書き誤ったものと推察されている。いまひとつは、本「歌仙行」は十四句までの断簡であるが、佐藤氏本所載歌仙は、三十六句を収めている点が異なる。

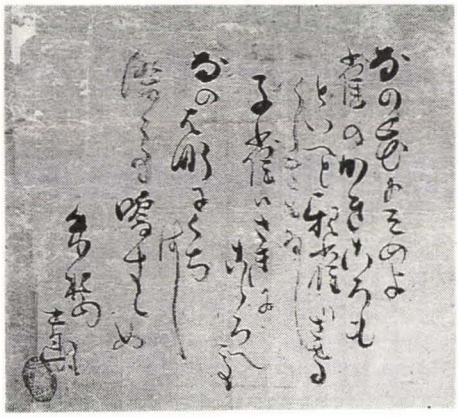
本懐紙は、もともと歌仙三十六句が完備したものであり、それが切断されたのか、何らかの目的で原本から発句以降第十四句のみ写されたのであろうが、それを判断する材料を欠いている。本懐紙の筆跡が以南のものであるかどうか、写真による判定は危険であり、どちらかが写しであるとみられるが、佐藤氏本所載独吟歌仙懐紙は、現在その所在が不明であり判断を保留せざるを得ない。

なお、歌仙についての考察は、佐藤氏『良寛の父橘以南』にある。参考として同書から、第十五句以下第三十六句（挙句）までをそのまま引用しておく。

尖杜農水草にかゝる風の神
　木陰きよむる厨の朝とて
華守と見のけ亭寺の謂とふ
　佛法僧となく春の暮
白瀧の一筋星の朧氣に
　主従五人よするからめ手
取出す言葉に命かけ合せ
　丈なる髪をかき分て切る
瑞籬に何を恨の物くるひ
　霰は篠を亂す日の暮
飛とり者留めぬ幾村うち過ぬ
　のぞみある世を忍ぶ天蓋
弟は阿闍梨のもとにありと聞く
　鳥目をいかに冬近き空
月遅き夜こと〳〵の下り簗
　稲蛸から〳〵も殿や待ら舞
むら雨に十夜の菅薦うちかつき
　堺の數寄者の皆なか勢けり
草庵に世のあら滿しをひッくゝり
　躰ろは蟻の都那るへし
彼岸ともしら亭櫻は咲にけり
　釋迦も孔子も御障那る春

## 士朗懐紙

なの花にそめよ雀のかきころも
　といへと親雀はさせるけしきもなし



子雀はさきにこゝろへてなのはなにくちはし染て鳴すゝめ

朱樹　士朗（朱樹）

士朗は、名古屋新町の町医。井上止春。通称、草庵のち松翁。初号支朗。他に枇杷園。朱樹叟と号す。寛保二年（一八一二）五月十六日没、七十一歳。

この二句は、服部徳次郎氏『暮雨巷暁台の研究』によれば、寛政十一年春刊青川撰『人来鳥』に「一勺井に会い戯れて」の前書きで収録する。したがって、本懐紙の執筆年は、寛政十年頃と考えられる。なお、漢字・かなの表記を別にして句形のみ問題にすれば、第二句目の中七「くちばし染て」は同書では「嘴冴て」であり、異同がある。

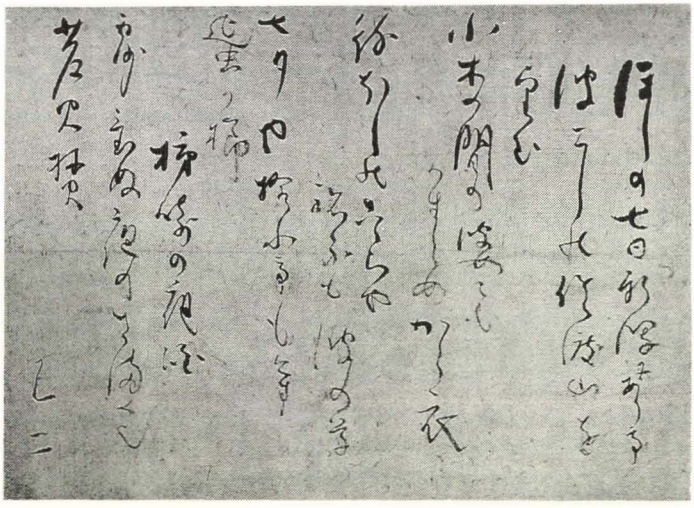
ところで、木村秋雨翁『越後文芸史話』によれば、士朗の越後引杖の事実は、確かめられないという。本懐紙は、『人来鳥』の前書につけば、一勺井と号する人に与えたものであると察せられるが、この人について未詳である。これが「古志のなごり」一巻に貼り込まれているのは、士朗が越後とゆかりのふかい暁台門の俳人であったから、また越後俳人が、士朗を訪ねたといったような縁があったからだろうと推測される。

士朗句は、菜の花に戯れる雀を視覚的にとらえた機知的な句である。親雀と子雀の行動の相違は、ユーモラスで明るい。作者士朗が親子の雀に呼び掛けた戯れの句であろう。温厚な士朗の人柄を彷彿とさせる佳句であるように思われる。

## 乙二懐紙

ほしの七日新潟にありて波こしの佐渡山を望む

小木の間の婆々もかすらめから衣



待ほしのこゝらやねふも波の草
七夕や拾ふてもとす蜑か櫛
　柿崎の夜泊
露置ぬ夜のさま也芦火焚

## 乙二

乙二は、俗名岩間清雄。号松窓。宝暦六年（一七五六）生、文政六年（一八二三）没、六十八歳。父は俳人麦蘿。享和三年（一八〇三）江戸に赴き成美・巣兆・道彦らと交わり、『畑芹』を刊行。文化元年、文政元年二度にわたり函館に渡り同地の俳壇のためにつくした。晩年越後より長崎に赴くことを企図したが、病のために果さず、郷里に没す。

本懐紙の執筆年は、文化四年（一八〇七）乙二五十三歳の折であろう。同年の乙二の越後行を「松窓乙二略年譜稿」（『白石市史』3の（1））によって記す。

四月二十二日白石を発し、福島県北部を経て米沢領に入り、諏訪峠・玉川宿から六月六日尾折峠を過（乙二句集）越後路に出る。長岡（石海）を経て六月二十九日に小千谷（由都流）に至り、新潟に廻って七夕に逢う。八月はじめには長岡に戻り、石海と由都流を伴い小千谷を出発、塚山・犀浜・直江津（八月十四日）・五智・米沢山麓・柏崎（九月二日）・椎谷・高田・出雲崎を巡回して、九月十八日再び長岡に戻る。

『白石市史』所載「乙二句集」には、「ほしの七日新潟より波越の佐渡山を望む」の前書で「小木の間」の句を収載している。また、「待ほしの」句は「新潟にて」の前書で収録され、「七夕や」句も同句集に収録する。しかし、柿崎での「露置ぬ」句は収録されていない。乙二は文化四年越後で越年し、翌年春頃帰国している。「露置ぬ」句が秋の句である故、これも文化四年中の作であると推察される。

先に引いた「略年譜稿」によれば、乙二は文政三年（一八二〇）六十七歳にも再び越後行を果し、病伏のため翌年まで同地に滞在していた。『新潟県史　通史編5　近世三』によると、長岡の杉坂石海、大安寺（新津市）の坂口東峨、水原の佐藤乙良、十日町の青山幽嘯らの門人がいたと言う。

ところで、本懐紙の句は、七夕の日に新潟より佐渡を眺望して詠まれた句である。乙二は、当然にも元禄二年（一六八九）七月七日出雲崎において佐渡を望んでの芭蕉句「荒海や」を意識していただろう。

芭蕉の旅からおよそ百二十年後の乙二句は、人事句の色合が濃い。芭蕉と乙二の個性の相違もさることながら、こうした俳風が志向されていた時代ゆえの句作と言えようか。

『古志のなごり』一巻の紹介をご許可いただきました糸魚川市教育委員会、ならび写真撮影などの便宜をおはかりいただきました同市歴史民俗資料館の原川幸雄氏に深謝申し上げます。